

ル・マニア語の長距離 Wh 要素移動における
Subjacency 効果について
スペイン語との比較において

石 岡 精 三

ル - マニア語の長距離 Wh 要素移動における Subjacency 効果について スペイン語との比較において

石 岡 精 三*

Subjacency effects in Romanian long-distance wh-movement
(In comparison with those in the Spanish counterpart)

Seizo ISHIOKA*

Key words : Checking, Left Dislocation, Subjacency

0 . はじめに

(1) のル - マニア語用例で観察されるように , 左方転位 (Left Dislocation (LD)) が適用された CP 内部から Wh 要素が長距離移動する派生は不適格と判断される (これを , LD 規制と呼ぶことにする)。例えば不適格と判断される (1b) において , C (că) で導入される embedded CP 内部の PP (*la film*) (" at the movies ") に LD が適用されている。(2) のル - マニア語用例が示すように , Focus 要素が長距離移動する派生も同様である。¹⁾

(1) a. [Pe cine] crezi [CP că a văzut Mihai *ti la film*]? (Alboiu 2000: p.198)

b.* [Pe cine] crezi [CP că **la film** a văzut Mihai *ti*]? (ibid.)

‘ Whom do you think Mihai saw at the movies? ’

(2) a. Ion MAŞINAi spunea [CP c-ar fi vrut-*oi ti Maria*] (Moțapanyane 1998: (10a))

b.* Ion MAŞINAi spunea [CP că **Maria** ar fi vrut-*oi ti*] (ibid.: (10c))

‘ It was the car that Ion said that Maria would have wanted ’

(3) a. [Qué libro] dice María [CP que le ha regalado Ana *ti*]?

b. [Qué libro] dice María [CP que **Ana** le ha regalado *ti*]? (Torrego 1984: (37a))

‘ Which book does María say that Ana has bought her? ’

(4) a. [UN VIAJE A LAS CANARIAS] dice Juan [CP que hizo Antonio *ti este verano*]

原稿受付：平成14年5月24日

*長岡技術科学大学語学センター

- b. [UN VIAJE A LAS CANARIAS] dice Juan [CP que **Antonio** hizo ti este verano]
 ‘ It is a trip to the Canary Islands that Juan says that Antoinio made this summer ’

(3) と (4) のスペイン語用例は , ル - マニア語で確認された LD 規制がスペイン語において適用されないことを示す。更に , (5) のル - マニア語用例は , 長距離移動する Wh 要素が通過する CP 内部においてもこの LD 規制が発動することを示す。(6) のスペイン語用例は , LD 規制に関する方言上の差異が存在する可能性を物語る。Goodall グル - プでは , Wh 要素の最終着地点である CP 内においてのみ LD 規制が適用される (6a), Torrego グル - プにおける LD 規制の適用停止は , Wh 要素が基底生成される CP に限定される (当該 Wh 要素が通過する CP とその最終着地点 CP 内では , LD 規制が発動する) 。これは , (6b) から (6d) によって例証される。

(5)(Alboiu 2000: p.196)

- a. Cei crede Ion [cp că (*Victor) spusese (Victor) [cp că (*revista) publicase (revista) ti]]?
 ‘ What does Ion think that Victor said that the journal had published ? ’
 b. Cei crede (Ion) [cp că (*Victor) spusese (Victor) [cp că (*săptămâna trecută) publicase revista ti (săptămâna trecută)]]?
 ‘ What does Ion think that Victor said that the journal had published last week ? ’

(6) a.*[Qué puesto] dijo Manolo que **Iris** cree que **Josefina** ocupa ti en la empresa? (Goodall 1993: (24))

‘ Which position did Manolo say that Iris believes that Josefina has in the company ? ’

b.*[Con quién] creías tú que quería Juan que **María** hablara ti? (Torrego 1984: (36a))

c.*[Con quién] creías tú que **Juan** quería que **María** hablara ti? (Torrego 1984: (36b))

d.*[Con quién] creías tú que **Juan** quería que hablara **María** ti? (Torrego 1984: (36c))

‘ With whom did you think that Juan wanted María to speak ? ’

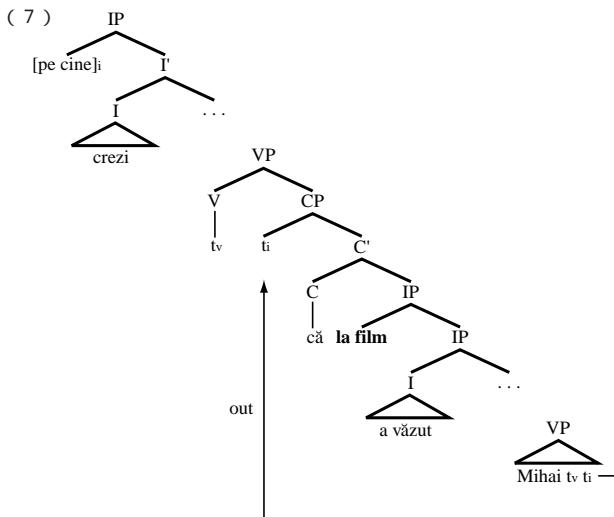
本稿では , 上で例示された LD 規制に関するル - マニア語とスペイン語の相違 , 更にスペイン語内部における方言上の相違を説明する新たな論法が提示される。Wh 要素移動の引き金となる素性の照合 (Checking) に類似する照合操作と , この照合に関与する素性が付与されたゼロ範疇に課される投射レベル上限に関する規制が想定される。

本稿は , 以下のように構成される。第 1 節において , ル - マニア語の LD 規制を説明する Alboiu (2000) の論法とその問題点が提示される。第 2 節では本稿の論法が示され , ル - マニア語の用例に適用される。特に Adjunct Wh 要素 (*de ce* “ why ”) の特異性について考察がなされる。第 3 節では , スペイン語における LD 規制とスペイン語内部で確認された方言上の相違を説明すると思われる

Parameter が提案される。第 4 節は結語を構成する。本稿の仮説群にとって問題を惹起すると思われる用例に検討が加えられ、これに対するひとつの打開策が提示される。

1 . Alboiu (2000) の概要と問題点

Alboiu (2000)において、本稿の(1)で観察された LD 規制は Subjacency に還元される。LD の適用を受けた要素は、IP に左方付加した位置に生起する。長距離移動する Wh 要素は連続循環的に移動し、Spec(C) を経由する。境界節点 (Bounding Node) として、IP と NP が指定される。これにより、LD が適用されたル - マニア語用例の非文性が説明が可能となる。例えば(1b)に対応する構造(7)において、Wh 要素の embd. Spec(C)への移動が Subjacency によって排除されることになる(この移動が、複数の境界節点(IP)を超える)。明らかに、この Alboiu (2000) の論法は、LD が適用されたスペイン語用例のすべてを不適格と予測する(問題点)²⁾³⁾



ここで、Torrego (1984) に検討を加える。Torrego (1984)において、Wh 要素が Spec(C) 位置への移動する場合、当該 CP 内での Subject-Verb Inversion が適用されると想定される。例えば(3b)において、Wh 要素 (*qué libro*) は、embd. Spec(C) を経由せず、一挙に matrix Spec(C) へ移動すると考えられて

いる。(3a) では, Wh 要素が embd.Spec (C) を経由すると想定される。これらの移動様式の存在は, スペイン語における Bounding Node として NP と CP が指定されると考えることにより導出されることになる。つまり, 主語を含む LD を適用された要素の生起は, Wh 要素が基底生成される CP 内に限定される (Torrego グル - プ)。これにより,(3) と (6b-d) のそれぞれが説明可能となる。しかしながら, 同じ論法は, Goodall グル - プにおける (6a) をも不適格と予測する(問題点)。

LD 規制を Subjacency の観点から説明する Alboiu (2000) と Torrego (1984) の論法は, 重大な問題を内包すると考えられる。そもそも, 本稿の調査対象である LD 規制を境界節点のパラメ - タ - 化によって説明することには無理がある。ル - マニア語とスペイン語における LD 規制に関わる挙動を説明できるより整合的な代替理論が必要となる。当然のことながら, この理論はル - マニア語とスペイン語における LD 規制の基本的相違のみならず, スペイン語内部における方言上の相違をも説明できる理論である必要がある。⁴⁾

2 . 仮説体系と代替理論

2 . 1 Agree 操作 (Chomsky 2000) と Subject-Verb Inversion

Chomsky (2000) は, 素性照合を一致操作 (Agree) によって説明する分析を提案する。ゼロ範疇に付与された解釈不可能な素性 (探査要素 (Probe, P)) は, 解釈可能な同じ素性である目標要素 (Goal, G) によって照合されることにより削除される。同時に解釈不可能な素性を含む G がはじめて P を照合できると考えられている (P を照合した時点で, G が含む解釈不可能な素性も削除される)。G は, P の領域 (Domain of P, D(P)) 内にあり, 局所要件 (Locality) を満たす必要がある。Agree 操作の条件として,(8) が仮定される。

(8) The assumptions for the probe-goal system (Chomsky 2000: p.122)

- a. Matching is feature identity.
- b. D(P) is the sister of P.
- c. Locality reduces to "closest c-command."

Wh 疑問節 (9a) の主要部 (C) は, 解釈不可能な素性 [Q] を付与される (当該素性が P となる)。Wh 要素は, 解釈可能な素性 [Q] と解釈不可能な素性 [wh] を含む (解釈不可能な素性に下線を付す)。C の Sister 要素である TP が D(P) となる。この領域内にあり素性 [Q] をもつ Wh 要素 (where) が G を構成する。

C と当該 Wh 要素の間で Agree 操作が適用され，C の解釈不可能な素性 [Q] が削除される（この段階で，Wh 要素の解釈不可能素性 [wh] も削除され，当該 Wh 要素は欠陥要素（Defective）を構成する）。疑問節中の C は，その Spec 位置に Wh 句を選択すると想定される。この選択特性を満足するため，[Q] を含む Wh 要素（*where*）全体が Spec (C) へ移動する。これにより，(9b) が生成される。

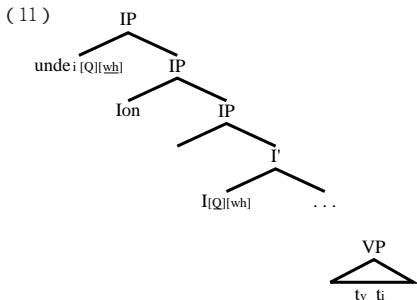
- (9) a. [CP C [TP John put the book where]]

b. [CP wherei [c 'C [TP John put the book ti]]]?

Chomsky (2000) と異なり，疑問節中の C が解釈不可能な素性 [Q] と解釈可能な素性 [wh] を付与されると想定する。この素性 [wh] が Trigger となり，解釈不可能な素性 [wh] をもつ Wh 要素が Spec (C) へ移動することになる。ル - マニア語（スペイン語）において，Wh 要素移動に関連する素性 [Q][wh] は I に付与される。移動する Wh 要素それ自体には，素性 [Q][wh] が付与される。移動によって同一の最大投射に複数の最大範疇が同一方向付加した構造が生成される派生は排除されると考える (cf. Kayne 1994)（これを，付加構造制約と呼ぶことにする）。⁵⁾

これにより，例えば (10b) の非文性が説明可能となる。(10b) に対応する派生構造 (11) において，LD の適用を受けた主語要素 (*Ion*) は I の最大投射に左方付加した位置に基底生成される。Adjunct Wh 要素（*unde* “where”）は Agree 操作と Checking の適用を受け，同じ I の最大投射に左方付加した位置へ移動する。この派生構造は付加構造制約によって排除される。(10a) における主語要素 (*Ion*) は基底生成された VP 内部の位置にとどまるため，当該派生が付加構造制約により排除されることはない。(10d) もまた，付加構造制約によって排除される。⁶⁾

- (10) a. Unde s-a dus Ion? (Moçapanyane 1998: (20a))
b.*Unde **Ion** s-a dus? (ibid.: (20b))
‘ Where did Ion go? ’
c. Știu unde s-a dus Ion (Moçapanyane 1998: (20a))
d.*Știu unde **Ion** s-a dus (ibid.: (20b))
‘ I know where Ion went ’



(12a-b) で観察されるように, Adjunct Wh 要 (*de ce* “why”) は特異な挙動を示す。LD 規制が関与しない。これまで, Wh 関連素性 [Ω][wh] が I に付与されると考えてきた。この素性付与は I のすべての投射が Wh 要素を C 統御する場合に適用されると考えてみよう。Adjunct Wh 要素 (*de ce*) はそれが短距離移動する場合に限り, I の最大投射に右方付加した位置に基底生成されると想定する。当該 Wh 要素が I の最大投射に右方付加した位置に生成される派生において, Wh 関連素性が I に付与されることはない(当該 Wh 要素を C 統御しない I の投射が存在する)。この場合, I の直接上位にゼロ範疇 (X) に Wh 関連素性が付与されると考える。結果として, 短距離移動する Wh 要素 (*de ce*) は, それが基底生成された位置から X の Checking Domain へ移動することになる(後述するように, 長距離移動する派生における当該 Adjunct Wh 要素は, I のすべての投射に C 統御される位置に生成される)。つまり, (12a-b) が付加構造制約によって排除されることはない(適格と予測される)。Adjunct Wh 要素 (*de ce*) が embd. CP 内に生成される (12c) は, 不適格と予測される。(12c) において, Wh 関連素性は root I に付与される (Root I のすべての投射が Adjunct Wh 要素を C 統御する)。この派生において, Root I の最大投射に主語要素 (*Iona*) が基底生成される (LD)。Adjunct Wh 要素が同じ Root I の最大投射の左方付加した位置へ移動する。これは, 付加構造制約によって排除される(不適格と予測される)。

- (12) a. De ce **pe** Ina n-o place nimeni? (Alboiu 2000: p.169)
 ‘Why does no one like Ina?’
 b. [De ce] **Iona** crede [cp că l-am invitat] ti? (Alboiu p.c.)
 c.* [De ce] **Iona** crede [cp că l-am invitat ti]? (Alboiu p.c.)
 ‘Why does Iona think that we invited him?’

2.2 代替理論

ここで、ル - マニア語用例における LD 規制を説明すると思われる論法が提示される。(1b) の用例で考える(便宜上、(1a-b) を再掲する)。Root I に Wh 関連素性 [Q][wh] が付与される。Wh 要素 (pe cine) には、素性 [Q][wh] が付与される。前述のように、Wh 要素移動の誘因となるのは素性 [Q] ではなく、素性 [wh] である。ここで、仮説 (13) を想定する。これは、長距離移動する Wh 要素が基底生成された CP だけでなく、当該 Wh 要素が通過する CP 内に生起する I (Intermediate I) にも素性 [wh] が付与される旨の仮説である。

少なくともル - マニア語において、素性 [wh] のみが付与された I の最大投射として I' が指定されると考える。(1b)において、LD の適用を受けた PP (la film) は embd. I' に左方付加した位置に生成される。長距離移動する Wh 要素 (pe cine) もまた、embd. I' に左方付加した位置を経由する。この派生は、付加構造制約によって排除される(不適格と予測される)。⁷⁾

(1) a. [Pe cine] crezi că a văzut Mihai ti la film? (Alboiu 2000: p.198)

b. *[Pe cine] crezi [cp că la film a văzut Mihai ti?] (ibid.)

'Whom do you think Mihai saw at the movies?'

(13) Hypothesis:

In long-distance wh-movement contexts, the feature [wh] is assigned to I \$ not only in CP \$ where the wh-phrase involved is base-generated but in CP \$ through which the wh-phrase passes.

本節の最後に、Adjunct Wh 要素 (de ce) が長距離移動する用例 (14b) に検討を加える。(14a)においては、Adjunct Wh 要素は Root IP 内に生成される。よって、Root I に Wh 関連素性が付与され、付加構造制約によって排除されることはない。(14b)においても、Root I に Wh 関連素性が付与される。同時に、embd. I に素性 [wh] が付与される(長距離移動する Adjunct Wh 要素 (de ce) は embd. I のすべての投射に C 統御された位置に生成されると想定されている点に留意されたい)。結果として、(14b) の派生は不適格と予測される(embd. CP 内における移動が付加構造制約によって排除される)。

(14) a. [De ce] crezi [cp că pe Ion l-a invitiat Victor] ti? (Alboiu p.c.)

b. *[De ce] crezi [cp că pe Ion l-a invitiat Victor ti?] (ibid.)

'Why do you think that Victor invited Ion?'

3. スペイン語における LD 規制

ル - マニア語用例を説明するために想定された論法は、対応するスペイン語用例 (6a-d) のすべてを不適格と予測する（問題点）（便宜上、(6) を再掲する）。スペイン語内部において、LD 規制に関する方言上の相違が観察される Torrego グル - プでは、Wh 要素が基底生成された CP 内においてのみ LD 規制の適用が猶予される。Goodall グル - プでは、Wh 要素の最終着地点以外の CP 内において、LD 規制の適用猶予が発動する。

- (6) a. [*Qué puesto*] dijo Manolo que **Iris** cree que **Josefina** ocupa *ti* en la empresa? (Goodall 1993: (24))
 ‘ Which position did Manolo say that Iris believes that Josefina has in the company? ’
 b. [*Con quién*] creías tú que quería Juan que **María** hablara *ti*? (Torrego 1984: (36a))
 c. * [*Con quién*] creías tú que **Juan** quería que **María** hablara *ti*? (Torrego 1984: (36b))
 d. * [*Con quién*] creías tú que **Juan** quería que hablarla María *ti*? (Torrego 1984: (36c))
 ‘ With whom did you think that Juan wanted María to speak? ’

この方言上の相違は、以下のように説明されると考えられる。両方言グル - プにおいて、Root I に Wh 関連素性 [Q][wh] が付与される（仮に、Root I が IP まで投射されると考える）。ル - マニア語の場合と異なり、長距離移動する Wh が基底生成される CP において、素性 [wh] のみが付与される I が IP まで投射される。Goodall グル - プでは、Wh 要素が基底生成された CP と Root I との間に生起し素性 [+wh] のみを付与される Intermediate I もまた同様に IP まで投射される。Torrego グル - プにおける Intermediate I は、ル - マニア語のそれと同じ拳動を示す（素性 [wh] のみを付与された Intermediate I が I' まで投射される）。I の最大投射として I' が指定される事象を I 投射規制 (I-Projection Constraint) と呼ぶ（I は通常 IP まで投射される）。

- (15) Parameterization with respect to I-Projection Constraint:

	Romanian	Spanish (Torrego)	Spanish (Goodall)
Intermediate I	+	+	-
Base I	+	-	-

(16b-c) で観察されるように、ル - マニア語の Adjunct Wh 要素 (*de ce* “why”) に対応するスペイン語 Wh 要素 (*por qué*) もまた、特異な拳動を示す（LD 規制の適用停止が観察される）。それでは、ル - マニア語用例 (12b) と (12c) の相違に類似する対立が存在するであろうか。Adjunct Wh 要素 (*por qué*) が I の最大投射に右方付加した位置に基底生成されるのは、当該 Wh 要素が短距離移動す

る派生に限定される。つまり、ル - マニア語 (12b) と (12c) の相違に類似する対立が存在すると予測される。この予測は、(17) によって例証される。

- (16) a. (No sé) a quién (*María) invitó (María) (Zubizarreta 1998: p.105)

‘(I don't know) whom María invited ’

- b. (No sé) porqué María no vino (ibid.)

‘(I don't know) why María didn't come ’

- c. *Por qué Juan quiere salir antes que los demás?* (Torrego 1984: (15b))

‘ Why does Juan want to leave before the others? ’

- d. *En qué medida la constitución ha contribuido a eso?* (ibid.: (15a))

‘ To what extent has the Constitution contributed to that? ’

- (17) a. [Por qué] Juana cree [CP que le hemos invitado] ti? (Karen Zaguna p.c.; Ignacio Bosque p.c.)

- b. *[Por qué] Juana cree [CP que le hemos invitado ti]? (Karen Zaguna p.c.; Ignacio Bosque p.c.)

‘ Why does Juana think that we invited him? ’

それでは、ル - マニア語用例 (14a) と (14b) の相違に並行する対比がスペイン語に存在するであろうか (便宜上、(14a-b) を再掲する)。 (14b) の非文性は、embd. I の最大投射として I' が指定されたためであった (embd. CP 内で、付加構造制約違反が惹起する)。既に述べたように、(14b) に対応するスペイン語用例において、embd. I は IP まで投射される想定される。長距離移動する Wh 要素 (*por qué*) が embd. Spec (I) を経由可能であるため、(14b) で観察され付加構造制約違反が観察されない。結果として、本稿の仮説群は、(14b) に対応するスペイン語用例を適格と予測することになる。この予測の適格性は、(14c) によって例証される。

- (14) a. [De ce] crezi [CP că pe Ion l-a invitat Victor] ti? (Alboiu p.c.)

- b. *[De ce] crezi [CP că pe Ion l-a invitat Victor ti]? (ibid.)

‘ Why do you think that Victor invited Ion? ’

- c. [Por qué] crees [CP que Juana no le ha invitado ti]? (Karen Zaguna p.c.; Margarita Suñer p.c.)

‘ Why do you think that Juana did not invite him? ’

4 . 結 語

LD 規制の適用停止に関して、Adjunct Wh 要素 (*en qué medida* “to what extent”) は、Adjunct Wh 要素 (*por qué*) に類似する挙動を示す (Torrego 1984: p.110)。このことは、上の (16c-d) で例証される。Torrego (1984) は、当該 Adjunct Wh 要素が最も深く埋め込まれた CP₂ 内部生成される派生である (18a) を適格と判断する。両 Adjunct Wh 要素が類似の挙動を示すと前提した場合、本稿の仮

説群は(18a)を不適格と予測する(問題点)。この予測は, Root IP と CP₁ 内部における付加構造制約から導出される。適格と予測されるのは, Root IP と CP₁ 内において LD が適用されない(18b)である。

- (18) a. [En qué medida] Juan había pensado [CP₁ que Pedro le había asegurado [CP₂ que la revista se arriesgaría a publicar eso ti]] (Torrego 1984: p.110)
 b. [En qué medida] había pensado Juan [CP₁ que le había asegurado Pedro [CP₂ que la revista se arriesgaría a publicar eso ti]]
 ‘ To what extent had Juan thought that Pedro assured that the journal would risk publishing that? ’

(18a)の適格性が惹起するこの問題は,どのように解決されるのであろうか。打開の糸口は, Partitive Wh-Phrase (*qué* + NP) が関与する用例の検討の中にあると思われる。(19b)と(19d)の用例から判明するように, Partitive Wh 要素が移動する Cycle において LD 規制が停止可能となる方言グル - プの存在が確認される(このグル - プにおいて,(19b)と(19d)は基本的に適格と判断される)。

スペイン語用例(20a)の適格性が示すように,一般的に直接目的語 Wh 要素(*qué* “what”)の移動によって形成される Wh 島内部からの間接目的語 Wh 要素(*a quién* “to whom”)の摘出移動が許容される。(20b)の非文性が示すように, この移動は Wh 島内部において LD が適用されない派生に限定される。(20c)の適格性は, LD 規制が Partitive Wh 要素によって導入される Wh 島内部において適用されないことを物語る。⁸⁾

- (19) a.*;Qué Juan ha preparado para la comida? (Arnaiz 1992: (11a))
 b.(?);Qué platos Juan ha preparado para la comida? (ibid.: (11b))
 ‘ What/which dishes has Juan prepared for the dinner? ’
 c.*;Dónde María ha almorcado el último mes? (Arnaiz 1992: (13a))
 d.(?);En qué lugar María ha almorcado el último mes? (ibid.: (13b))
 ‘ Where/In which place has María eaten lunch last month? ’

- (20) a.;[A quién] no sabía Juan qué; le había regalado Pedro t_j t_i ayer? (Lema 1992: p.183)
 b.*;[A quién] no sabía Juan qué; Pedro le había regalado t_j t_i ayer? (ibid.)
 c.;[A quién] no sabía Juan [qué cosa] Pedro le había regalado t_j t_i ayer? (ibid.: p.184)
 ‘ To whom did Juan not know what/which thing Pedro had bought him yesterday? ’

(19)と(20)で確認された Partitive Wh 要素の特殊性は,当該 Wh 要素に対応する Wh 関連素性 [Q][wh] が I の直接上位に生成される X に付与されると想定することにより説明される。例えば(19a-b)において, LD 要素の適用を受けた主語要素(Juan)は, Root IP に左方付加した位置に生成される。Partitive Wh

要素が生起する (19b)において、Wh 関連素性は I の直接上位の X に付与される (Wh 要素 (*qué platos*) が X の Checking Domain へ移動し、(19b) が生成される) (19a)においては、Wh 関連素性は I に付与されるため、Wh 要素 (*qué*) は I の Checking Domain (Spec (I)) へ移動する ((19a) は、生成不能となる)。⁹⁾

ここで、上で想定された Partitive Wh 関連素性の付与形式が長距離移動する Wh 要素が基底生成される CP と当該 Wh 要素が通過する CP 内部でも適用されると考えてみよう (これらの CP 内部でも、I の直接上位に生成された X に単独素性 [wh] が付与される)。以下の用例 (21a-b) からも判明するように、Torrego グル - プでは、この Partitive Wh 要素の生起がもたらす Wh 関連素性 [Q][wh] と単独素性 [wh] の付与形式の特殊性は、Adjunct Wh 要素 (*en qué medida*) に限定されると考えられる。これにより、Torrego グル - プにおける (18a) の適格性が説明可能となる。(19) の用例を挙げる Arnaiz (1992) では、Partitive Wh 要素の生起に随伴する特殊な素性付与形式が一般的に適用される。用例 (21c) が示すように、Goodal グル - プではこの Partitive Wh 要素に随伴する素性付与の特殊性が観察されない。

- (21) a. [Qué libro] dice María [que Ana le ha regalado ti] (Torrego 1984: (37a))

b.* [Qué libro] **María** dice [que Ana le ha regalado ti] (ibid.: p.113)

‘ Which book does María say that Ana has bought her? ’

- c.* [Qué puesto Josefina tiene en la empresa? (Goodall 1993: (2a))

‘ Which position does Josefina have in the company? ’

- (22) ¿[Qué puesto] **Manolo** dijo que **Iris** cree que **Josefina** ocupa ti en la empresa?

‘ Which position did Manolo say that Iris believes that Josefina has in the company? ’

これが妥当する場合、Torrego グル - プと Goodall グル - プでは、(22) が不適格と予測される。Arnaiz グル - プの用例としての (22) が適格と予測されることになる。これらの予測を検証することにより、本稿で設定された仮説群の修正・廃棄が必要であることは言うまでもない。¹⁰⁾

註

- 1) LD の適用を受けた要素は、太字で表示される。本稿では、Wh 要素が長距離移動する場合に觀察される LD 規制に関する論考が試みられる。
- 2) Alboiu (2000) は、これを移動による Topicalization と解釈する。本稿で前提される LDにおいては、当該操作の適用を受ける要素は I の最大投射に左方付加した位置に基底生成されると想定される（ル・マニア語とスペイン語の双方において）。本稿と同様に、定動詞は I 位置に生成されると前提され、Wh 要素移動の引き金となる素性が I に付与されると前提される。
- Chomsky (2000) では、この連続循環適用による Spec (C) 位置への一時停止は、(i) の Phase-Impermeability Condition から導出されることになる。つまり、長距離移動する Wh 要素は、それが生成され、あるいは通過する CP の Edge (つまり、Spec (C)) 位置を経由することになる。

(i) Phase-Impermeability Condition (Chomsky 2000: p.108)

In Phrase with head H, the domain of H is not accessible to operations outside ,
only H and its edge are accessible to such operations.

- 3) 付加構造を形成する双方の IP が独自の IP であり、それぞれ独自な Bounding Node を構成するとする考え方にも問題があると思われる。
- 4) Bounding Node の設定に直接依存することのない Chomsky (1986) の Barriers 理論の枠組でも、本稿の検討対象である LD 規制が適切に説明されるとは考えられない。
- 5) 移動が関与しない派生 (LD) では、複数の最大範疇が同一の最大投射に左方付加した位置に生成可能となる。
- 6) 仮に、(10c-d) における間接疑問節が IP ではなく I'を構成すると想定する (I の最大投射として IP が指定されるのは Root Context のみと考える。Non-Root Context では、I が I'まで投射されると想定する)。これにより、以下の (ib) は不適格と予測される。(ib) は生成不能となる。生成されるのは本文の (10d) である。(ia) において、主語要素 (*Ion*) は LD の適用を受け、IP に左方付加した位置に基底生成される。

(i) a.[IP ***Ion*** [IP [I' unde s-a dus]]] (Moçapanyane 1998: fn. 7)

b.* Štiu [I' ***Ion*** [I' unde s-a dus]] (ibid.)

- 7) Focus 要素が生起する (2) などの用例もまた、同様の論法によって説明可能であろう。
関与する素性として [Q] と [Focus] が関与すると思われる (詳細な論考は、稿を改める)。本稿では、(1a-b) において長距離移動する Wh 要素が Embd. Spec (C) 位置を経由するか否かは考察されない。
- 8) 以下のスペイン語用例 (i) で示されるように、直接目的語によって形成される Wh 島内部からの主語 Wh 要素の摘出移動が許容される (ia)。主語 Wh 要素によって形成される Wh 島内部からの目的語 Wh 要素の移動は排除される (ib)。(ib) との比較において、長距離移動する Wh 要素に対応する Resumptive Clitic (*lo*) が生起する派生は適格と判断される (1c)。これに関する論考は、石岡 (2002) を参照されたい。

(i) a. ¿Quién no recuerdas [[qué película] dirigió ti tj en el cincuenta y uno]?

‘ Who don t you remember what movie directed in “ 51 ”? ’ (Torrego 1984: (68))

b.*_c [**Qué película**] no recuerdas [quién dirigió ti tj en el cincuenta y uno]?

‘ What movie don t you remember who directed in “ 51 ”? ’ (ibid.: (69))

c._c [**Qué libro**] no sabes [quién lo compró ti tj]? (Contreras 1992: (11b))

‘ What book don t you know who bought it? ’

- 9) 適切な出力として，以下の (ia) が指定される。同様に，(20a) と (20b) の相違も説明可能となる。(20b) は，生成不能となる（生成されるのは，(ib) である（未検証））。I の直接上位に生成される X が C に対応するか否かについては，稿を改める。
- (i) a. Juan, ¿qué ha preparado para la comida?
b.? [A quién] no sabía Juan **Pedro** qué le había regalado t̪i ayer?
- 10) Torrego グル - プと Goodall グル - プに対する本稿の予測の妥当性は，それぞれ Torrego (1984: p. 113) と Goodall (1993: p.206) で検証される。

参考文献

- Alboiu, Gabriela (2000) *The Features of Movement in Romanian*, Ph. D. dissertation, University of Manitoba.
- Arnaiz, Alfredo (1992) "On Word Order in Wh-Questions in Spanish," *MIT Working Papers in Linguistics* 16, 1-10.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, MIT Press, Cambridge, MA.
- Comorovski, Ileana (1986) "Multiple Wh Movement in Romanian," *Linguistic Inquiry*, 17, p.171-177.
- Comorovski, Ileana (1989) *Discourse and the Syntax of Multiple Constituent Questions*, Doctoral dissertation, Cornell University.
- Comorovski, Ileana (1996) *Interrogative Phrases and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht/Boston/London.
- Contreras, Heles (1992) "On Resumptive Pronouns," *Current Studies in Spanish Linguistics*, ed. by Héctor Campos and Fernando Martínez-Gil, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Cornilescu, Alexandra "The Double Subject Construction in Romanian," *Comparative Studies in Romanian Syntax*, ed. by Virginia Moțapanyane, Elsevier, Amsterdam/New York.
- Goodall, Grant (1993) "Spec of IP and Spec of CP in Spanish Wh-Questions," *Linguistic Perspectives on the Romance Languages*, ed. by William J. Ashby, Marianne Mithun, Giorgio Perissinotto, and Eduardo Raposo, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Lema, José (1992) *Licensing Conditions on Head Movement*, Ph. D. dissertation, University of Ottawa.
- Moțapanyane, Virginia (1998) "Focus, Checking Theory and Fronting Strategies in Romanian," *Studia Linguistica* 52 (3), 227-243.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Suñer, Margarita (1995) "Negative Elements, Island Effects and Resumptive *no*," *The Linguistic Review* 12, 233-273.
- Torrego, Esther (1984) "On Inversion in Spanish and Some of its Effects," *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- Zubizarreta, María Luisa (1998) *Prosody, Focus, and Word Order*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 石岡精三 (2002) 「イタリア語における Wh 島内部からの摘出移動について - スペイン語との比較において - 」,『ロマンス語研究』35, 24-33.